

エレメンタルスクール G×D

カオスサイン

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

これはほとんどの者が知る兵藤一誠の物語ではない。

これはとある異世界に迷い込み其処で出会った仲間達との絆と愛を引き連れて元の世界に戻った赤龍帝の物語である！

目次

プロローグ&キャラ設定集

プロローグ ————— 1

同契赤龍帝と旧校舎のディアボロス編

EP I 「非日常の誘い」 ————— 6

EP II 「悪魔と聖女」 ————— 12

EP III 「領土侵犯をぶっ潰せ！」

23

赤龍帝同契者とエクスカリバー編

EP IV 「聖に囚われし因縁」 ————— 39

EP V 「奪われし聖剣」 ————— 46

EP VI 「決意の同契！墮天使幹部を打

倒せよ！前編」 ————— 51

EP VII 「決意の同契！墮天使幹部を打
倒せよ！後編」 ————— 64

赤龍帝同契者と三勢編

EP VIII 「事情説明ともう一人の眷属」
71

プロローグ&キャラ設定集

プロローグ

Side?

やあ、俺の名は兵藤 一誠。高一の夏、俺はある不思議な体験をした。

「はっ!?俺は…」

確かバーグレットさんが仕掛けた爆破にアニキ達と巻き込まれてそれで咄嗟に皆と一斉同契して…そうだ!

「大丈夫か!?皆!」

「ううーん…私は大丈夫…」

「わ、私もなんとかー」

「はにやひらー…」

「リンだけはモロにダメージ受けちゃったみたいですよ」

「皆無事…ではないみたいだな…」

「え?」

「アニキ達の姿が何処にも見当たらないんだ…」

俺のパートナーである少女達の無事は確認出来たが、慕っていた者達の安否が確認出来なかった。

『それについてだが相棒…先程から久しく感じられなかった特有の気配を感じた』

「それってもしかして!…」

俺に神器として宿りもう一つの力として今迄長い戦いを共に戦い抜いてきた伝説の二天龍の片割れであるドライグがそう口を開いてきた。

『ああ、恐らくあの時の爆発の衝撃によって我々だけがこつちの世界に飛ばされてきた可能性がある』

「そうか…」

『心配せずともあの者達ならば大抵の苦難は難無く乗り越えていけるであろう…しかし今後の事は決める必要性があるぞ』

「分かっているさ」

【紅山猫（レッドリンクス）】のイッセーから只の学生の兵藤一誠に戻る時か…。

後で驚いた事だが此方の世界の時間はあの世界に迷い込んだ時からそう経ってはいなかった。

危うく捜索願ひ出される所だったぜ。

あの世界で出会い、パートナーとして契約を結び共にこの世界に来た少女達を家に連

れて帰ると両親には物凄く驚かれた。

彼女達の経歴に関しては何となく嘘を信じ込ませるしか他なかったが。

「イツセー…何処に行くの？」

「ん？ああルナか、ちよつとパトロールにな」

俺の最愛の人の一人であるルナが家から出ようとしている俺に気が付き聞いてくる。

「私も一緒に行つて良い？…」

「別に良いが…体力面は大丈夫なのか？」

ルナがついて来たいと言つてきたがほんの少し前迄一斉同契していたからまだ影響が残っているのではないかと心配した俺は聞き返す。

「うん、お食事で回復出来てるから…」

『まあ、今の相棒ならその辺のはぐれ悪魔相手ならば神器の力だけで十二分に対応出来るだろう…早々彼女達の力をも使わねばならない様な状況は限り無く少ない筈だ』

「それもそうだな」

ドライブもそう言うのでパトロールにルナも連れていく事にした。

〈町外れの廃屋〉

「この辺かドライブ？」

『ああ、魔力の残滓が此処一帯だけ濃く残っているな。』

恐らく奴さんはまだ居る筈だ』

俺達はドライグの探知を頼りに廃屋を訪れていた。

「んんん？なんだ人間が又餌になりにも来たかあー？」

「はぐれ悪魔だな？」

「んん？悪魔を知っているという事はお前神父…ではなさそうだな。

まあガキに負ける俺様じゃないけどなあー！」

現れたはぐれ悪魔の男は此方を完全に見下した様な態度で襲いかかってきた。

「ルナ下がつてろ。いくぞー！」

【BOOST！】

「なっ!?神器持ちだと!?…」

「遅いなー！」

「ぶべっ!?!…」

完全に此方を見下していたはぐれ悪魔は倍加しただけの俺のパンチの一撃で思いつ切りに吹き飛ばされ気絶した。

「…つて弱っ!?!もうちよつと持ってくれよお〜」

『相棒…それは酷なものだぞ』

呆れるドライグを尻目に後の事はこの町を管理しているという悪魔に任せようとする

の場を離れた。

その悪魔には一言挨拶入れるべきかな。

「あの人間掃討に危険みたいだな。」

早急に処分せねば我々の計画に支障をきたすか…」

その様子を陰で見ていた者が居た。

同契赤龍帝と旧校舎のディアボロス編

EPI「非日常の誘い」

S i d e 一 誠

急な事だったが親父がルナ達の学園に編入手続きをやってくれたおかげで彼女達も通える事になった。

「皆、学園はどうだ？」

「皆楽しそう…」

「御弁当の御裾分けしてくれて幸せ〜！」

「皆さんお優しくくていいですね！」

「優しいのー」

クラスメイト達と早くも打ち解けられているようで心配は無用だったか。

リンに限っては餌付けされてるようだが

「部活とか自由に入って良いからな」

「分かったー」

ルナ達は部活見学に行った為に俺一人となる。

さてお袋に買物頼まれてるしとつと行くか。

学園を出ようとしたその時であった。

「あ、あのー！」

別の学校の制服を着込んだ黒髪ロングの清楚そうなおっぱい美少女が声をかけてきたのだ。

「あの不躰なんですが一目惚れしてしまいました！どうか私と付き合ってもらえませんか?!」

「ん? おおお!? … (ドライブグ: …)」

「『ああ、隠しているつもりなのだろうがこの娘から墮天使の気配がする…どうする気だ?』」

「(どうするも何もこんな美少女が自ら進んで俺の命狙いにくるとは到底思えないな…どうせ裏で糸引いてる輩がいるんだろうからその野郎を何とか引き摺り出してとつちめてやるさ!」

それに美少女のお誘いを断るのは俺のポリシーに反するぜ!」

「『相棒…』」

「勿論良いぜ!」

「本当ですか!?! よかった!」

ドライグの呆れをスルーし俺は墮天使の気配がする美少女、偽名だろうが天野 夕麻ちゃんの告白を二つ返事で受け取りデートの約束をした。

「あ、マスターおっ帰りー！」

「リンだけか？」

「うん、ルナちゃん達はそれぞれ良いトコ見つけたみたい」

「そうか」

買物を終えて家に帰るとリンだけが先に帰って来ていた。

きつと自分に合う部活が無かったのである。

俺は先程の件をリンに話した。

「マスターはスケコマシだね！」

「だけど其処が良いトコだよ！」

「はは…もう後悔はしたくないからさ…」

俺は向こうの世界でのあの時の事を思い出す。

「エディルレイドも結局の所は恐れるべき兵器でしょ！貴方のその妙な力だつて！」

「それは違う！彼女達にだつてそれぞれの想いがある！それを押し殺させてまでの保護

は只のエゴの押し付けだ！」

「そうですねよ！今のアークエイルは何処もおかしいです！」

それでも貴方は……」

「戯言を！あくまでもアークエイルの意思に齒向かうというなら貴方達も我々の敵だ！」

「糞っ!?!……」

救えなかつたあの子の事を……

『あの小娘の事か……あれは誰が止めようとしても最早止められなかつただろう……相棒達が戦わなければ無為な犠牲がもつと増えてしまつていた筈だ……』

「でもな……」

あの時もつと出来る事があつたのではないか……そう思えてならない。

まあその後悔は後に晴らす事が出来たのだが。

兎に角出来る限りの事はやろうと決意を新たにした。

翌日、放課後デートにて

夕麻ちゃんとのデート決行は至つて問題無く進んだ。

途中でナンパの不良連中に絡まれたりもしたが難無く撃退した。

そして夕暮れの公園で

「ねえ、イツセー君お願いがあるんだけど……」

「死ぬのだけは勘弁だぜ？」

「え？」

脅す先回りで箆手を出していく。

「バレてたんだ……」

「別に俺は夕麻ちゃん自身が進んでこんな事やっているとは思っていない。

君にこんな事やらせてる屑は何処のドイツなんだ？」

「ふん、低俗な人間一人相手に何時までかかっている？ レイナーレ」

観念したかのように夕麻ちゃんは暗い顔をしていた。

俺は今回の仕掛け人の存在を彼女に問いただそうとするとシルクハットを被ったオッサンが現れる。

「ど、ドーナシック……」

どうやら向こうからやって来てくれたようだな。

「墮天使のオッサンよお、一体何を企んでいやがる？」

「ふん、低俗な人間になぞ我々の崇高な思惑の理解など出来まい。

む？……」

ドーナシックと呼ばれた墮天使は明らかな見下しをして口を開いていた。

其処でふと墮天使の顔が険しくなる。

「レイナーレ、此処は一旦撤退するぞ。

「どうやら奴等に嗅ぎ付けられたようだ」

「はい……」

「命拾いしたな人間の小僧！次に我々の計画を邪魔しようものならその命は無いと思え！」

そうなるのはどっちだか……どうやら此処を管理している悪魔が堕天使の事に気付いたようでそれを察知したドーナシークは夕麻ちゃんを連れて急いで撤退していった。

「あら？堕天使の気配を感じて来たのだけれど……つと貴方確か……」

直後に現れた赤い魔法陣から赤毛の美女が現れた。

あの人がこの町の管理者であるリアス・グレモリー先輩か。

「はい同じ駒王学園の生徒です。それと神器所有者でもありません」

「!?そう……なら明日の放課後に此方から使いを寄越すからお話をお聞かせ願えるかしら？」

「良いですよ」

グレモリー先輩にそう言われ返答し帰った。

E P II 「悪魔と聖女」

Side 一 誠

「やあ、君が兵藤君だね？」

「そうだ」

翌日の放課後、グレモリー先輩の使いと名乗る金髪の男子生徒、木場 佑斗が俺を呼びに来たので早速彼の案内を受けて彼女達の待つ場所へと足を運んだ。

ルナ達は今は関係無いのでそれぞれ行動している。

「これから悪魔としてよろしくね。それで早速だけど」

「そうですね…」

「オカルト研究部」と書かれた旧校舎の部屋に入り、待っていたリアス・グレモリーとその眷属達の歓迎を受け、俺はドライブグから聞いていたこの世界の情勢を言う。

「それだけ理解出来ているのなら十分だわ。」

それで兵藤君、貴方に宿っている神器についてなんだけど」

「ええ、ドライブグ！」

グレモリー先輩に促され俺は赤龍帝の箒手を出現させる。

「その神器は真逆!?…」

「ええ、神滅具の一つ、二天龍が片割れであるドライグ・ア・ゴツホが封印されている【赤龍帝の籠手〈ブーステッドギア〉】です」

俺が籠手を出すと皆驚いた表情を見せていた。

「あの無尽蔵に力を倍加出来るという…：兵藤君、貴方悪魔に転生してみないかしら?」
「…」

グレモリー先輩は他種族を悪魔に転生させる事が可能なアイテム「悪魔の駒（イーヴィル・ピース）」を取り出し、そう提案を促してきた。

正直デメリットの方が多しな。

まあそのデメリットもドライグが緩和してくれるので影響はほぼ無いに等しいが…
「眷属になっても良いのですが先輩、その前に一つだけ聞きたい事があります」

「何かしら?」

「貴方は人間が好きでいられますか?」

俺は一つの質問をグレモリー先輩にした。

あの世界で人の心を喪失し偏見だけに凝り固まった輩を見てきたからこそ出てきた
問いだった。

「…どういう意味なのかは分からないけれど好きよ。」

悪魔も…いえ、三大勢力も本質的には人間と同じだから…」

俺の問いにグレモリー先輩はそう言いながら微笑む。

「…割と良い答えですね。」

よろしいでしょう、この俺兵藤一誠はリアス・グレモリーの眷属として仕える事を此処に誓います」

「決まりね！」

グレモリー先輩の答えに納得した俺は彼女の眷属として転生悪魔に成る事を決めた。

その際、使用した兵士の悪魔の駒八つの内、四つが変異の駒（ミューテーション・ピース）へと変化していったのは二度驚かれた。

翌日…俺がグレモリー眷属となつて最初の仕事である悪魔との契約者を募る為のチラシ配りを終えて一休みしていた時だった。

「はわうっ!？」

「ん?？」

目の前で何も躓く様な物も無いのに盛大に転んだ修道服に身を包んだ金髪の美少女がいた。

「何故こうも転んでしまうのでしょうか…」

「大丈夫かい?？」

俺は駆け寄り少女を助け起こす。

「あ、ありがとうございます！」

でも言葉が通じる人がいるとは思っていませんでした。

あ、私シスターのアーシア・アルジエントといいます」

ああ、そういや転生悪魔に成った事で自動翻訳が付与されたんだっけか。

「アーシアか。俺は兵藤一誠、イツセーて呼んでくれ。」

それにしても君みたいな子が一人でこの町に来たのは何故だい？」

「イツセーさんですね！」

えっと、私この度この町の教会に赴任する事になりました」

「教会に？」

「ええ……」

俺はアーシアの話聞いて可笑しいと思った。

何故ならこの町の教会は既に何年も前に廃れてしまっているからだ。

『『ドライグ……』』

「『ああ、俺も可笑しな話だと思っていた所だ。』

恐らく先日の墮天使の件も絡んでいるとみて間違い無いだろう』

俺の予想とドライグの予想が一致していた事で思考を巡らせる。

どの道転生悪魔と成った今では教会に近付くのは自殺行為に等しい。

しかし墮天使も絡んでいるとすればアーシアは間違いない無く狙われている！

「なあアーシア、君は神器を持っていたりしないか？」

「え？あ、はいそうですけど…でも何故イツセイさんがその事を？」

「良く聞いてくれ…」

俺はアーシアに廃教会の事を教えた。

彼女を不安がらせない為に狙われている事は伏せて。

「そんな!…」

「そういう訳だからアーシア、君を此方で保護しようと思っっているんだが君はどうしたい？」

「お、お話はとて有難いのですけれど、私をこの町に呼んだのは知り合いでして…」

アーシアは俺の提案をバツが悪そうに断って来た。

それにしても彼女の知り合い？もしや…

「そうか…でも今日はもう遅いからうちに宿泊していきな」

「は、はいそうさせて頂きますね！」

とりあえずもう夜も近かったので俺は一日だけアーシアを宿泊させる事にした。

そして、翌日

「すみませんリアス部長！今日は用事があるので部活には出れませんので！」
「そう…なら仕方無いわね…」

俺はアジアに町の案内をする為に部長に断わりを入れて学園を出た。

ちなみに彼女の護衛にはリンを付けてある。

「悪い、リン、アジア待たせた！」

「あ、まふたー！」

「このハンバーガーって美味しいですね！」

「つてうおい!?リッソン…食事は三人でつて言つていただろ…」

待ち合わせの公園に着くと、リンが付近のフードショップで買ったポテトを思いつ切り頬張つていて、アジアはハンバーガーを少しずつ食べていた。

「だつてアジアちゃんが食べたそうにしてたんだもん〜！」

「お前の旺盛過ぎる食欲と一緒に使つて言ひ訳に使うんじゃない！」

「あて!?!…ご、ごめんなさい〜！」

リンに一発鉄拳を入れてやつてから俺も食事タイムに入った。

食い終わつて早速町の案内を開始する。

一時間後に立ち寄つたゲーセンでアジアがUFOキャッチャーの景品のぬいぐるみを欲しそうにしてたので取つてあげてプレゼントした。

そうかからなかったよUFOキャッチャーには？

はい、お菓子キャッチャーを目にしたリンにねだられて英世さんがお二人程犠牲にせざるを得ませんでした。

タワー崩すのにホント苦労した…鬼設定え…。

あの時の店員さんのイイ笑顔っていつたら…（遠い目

町の案内も終わってまた公園で一休みしていた時だった。

「はあはあ…」

「ン？あの娘は…」

公園の入り口で誰かを探しているからの様に息を切らした黒髪の美少女がいた。

そう、夕…レイナーレ、堕天使の少女だった。

「レイナーレ様！」

「アーシアよかった！こんな所に居たのね！

ってイツセー君までどうして!?!」

「偶然会ってな…夕麻ちゃんこそどうしてアーシアを？」

「そうだった！アーシア、早くこの町から離れるのよ！」

「え？」

レイナーレの言葉にアーシアは啞然とする。

「でないと貴方の身が危険なの！だから……」

レイナーレが必至な顔で事情を説明しようとしていた時だった。

「だからどうするっていうのだ？」

「ドーナシック!?!……」

其処で俺を襲おうとしてきたおっさん墮天使が割り込んできた。

「あの時の人間の……いや悪魔の小僧も居るとはな……まあいい、姿が見えないから可笑しいと思っていたがレイナーレよ、何を考えている？」

「それはこっちの台詞よドーナシック！」

アーシアを呼び出して彼女の神器を奪おうと画策していただなんて！

だから私はグリゴリにこの事をお伝えしてアーシアを保護してもらうわ！」

「させると思っているのかね？」

「この町の管理人であるリアス・グレモリーにも存在が割れている以上貴方にも分が悪い筈だわドーナシック！」

レイナーレはドーナシックにそう叫ぶ。

が……

「あの様な青二才に遅れを取る様な事はあり得んよ。」

その為に奴等の糧となりかねん契約者の人間を始末して回っていたのだからな！」

「なんですって!?!…」

「…」

ドーナシークの言葉に信じられないといった表情をするレイナーレ。

「グリゴリに進言すると言ったな? しかも構わないが我々がそうなる前にコイツがどうなるかは知らないぞ」

ドーナシークは続けて指を鳴らし空中ヴィジョンを出現させる。

其処に映っていたものは…

「そんなミツテルト!?!…」

「ミツテルト様!?!」

どうやら二人の知り合いらしい金髪の墮天使少女がボロボロで十字架の礫にさせられていた。

「全くこれだから階級の低い者は手を焼かせる」

「ドーナシークお前えー!」

仲間を傷付けられてキレたレイナーレが光の槍を持ってドーナシークに仕掛けようとした。

だが…

「ふん」

「え!?がっ!?!…」

ドーナシークに突撃しようとしていたレイナーレは不意に違和感を感じた瞬間にドーナシークの背後から現れた青髪の女墮天使によって齒がい絞めにされていた。

「レイナーレ様!?!」

「か、カラワナーナ…貴方までドーナシークの思惑に乗って…」

「この私が何も対策を施していないとでも思っていたのかね? 貴様は甘過ぎるのだよ!」

どうやらドーナシークがレイナーレの体に何時の間にか一方的な転送術のマーキングを施していたようだ。

「さあ、シスターアーシアよこのままこの女やミッテルトを見殺しにするかそれとも大人しく我々についてくるか選ぶが良い!」

「…すみません…」

「アーシア、君は…」

「そうだ…これで計画を進行させられる!さらばだ!」

優しい子なのだろう…アーシアはこれ以上レイナーレ達が傷付けられるのは我慢出来なかった彼女はドーナシークの誘いに乗るしかないと彼の傍に行きレイナーレ共々転送されて行ってしまった。

「マスター……」

「今はこの事を早急に部長に伝える必要がある。」

リンはルナ達に明日以降の予定を空けておくように伝えておいてくれ！」

「分かったよ！」

リンにそう伝えて別れ、俺はリアス部長にこの事態を伝える為にスマホを取り出した。

E P Ⅲ 「領土侵犯をぶつ潰せ！」

Side 一 誠

「どうしてもつと早くに言わなかったのよ！」

「見極める必要性があり御報告が遅れてしまった事は本当にすみませんでした！」

ですが件の者が組織を介さず独断で動いているのは愚か、悪魔側の関係者を始末しているとなると立派な領土侵犯なのは明白です！」

早急に対応された方が良いかと思われませう！」

翌日、俺はリアス部長に呼び出され独断で情報を集めていた事を咎められた。

「それもそうね……完全に舐められている事は明らかだもの……」

俺がアジア達と居る間、どうやら木場が向かった契約者の家にはぐれエクソシストが数人侵入していたらしく住人が一人残らず殺されてしまったらしい。

ドーナシーク……奴は着実に計画を進行させる気らしいな。

「部長……事の真偽が確認出来ました！」

グリゴリは今回の件に関して一切関与しておらず又把握していなかったとの事です」

「決まりね！ イッセー、貴方の実力見せてもらおうわよ！」

子猫と佑斗と共に廃教会に向かい敵を向かい討ちなさい！」

「了解しました！部長と副部長は？」

「私と朱乃は他の契約者達の護衛に回るわ！」

「分かりました！御武運を！」

木場、子猫ちゃん行こう！」

「はい」

「うん！」

部長の指令を受けて俺は木場、子猫ちゃんと共に廃教会に向かう事になった。

「と…ちよつと待っててくれないか二人共」

「？」

「なんだい？」

校門を出る前に二人を呼び止める。

「助っ人を呼ぶから少しだけ待っていてくれ」

「助っ人ですか？…」

「ああ」

俺はスマホを取り出しルナ達を呼んだ。

「イツセー、行くの？」

「ああ！協力してくれ！」

「勿論だよ！アーシアちゃんは友達だもん！」

しばらくしてルナとリンが校門前にやって来る。

後の二人は部活を抜けられなかったみたいだ。

「イツセイさん、その二人は？」

「ああ…俺の知り合いで先日学園に編入してきた子達だ。」

大丈夫、彼女達の力量ならはぐれ数十人程度なら対応出来るからな」

「本当かい？」

「ああ」

「そうですか…」

木場はルナ達に疑いの目を向けてくるが俺が保障すると納得する。

一方の子猫ちゃんはルナ達の事をじっくりと観察していた。

そういう彼女って元は猫の妖怪だったんだっけ…特殊な力でルナ達に違和感を感じたのかもしれないが…今は真実を話せる程の仲ではない。

今度こそ廃教会へと向かう。

「おらあ！リアス・グレモリー様の令によってお前達の計画を潰させてもらうぜ！」

「んア？おっほ！悪魔の団体さんがまた来やがりましたか〜！」

「フリード・セルゼン！やはりお前も！」

道場破りすると中に居た白髪の神父が此方が悪魔だと認識すると喜々とした表情を見せてくる。

どうやら奴、フリードと木場の間には因縁があるようだが…

「やあやあ、騎士の悪魔くうーん今度こそチミ達を斬り刻んであげちゃう！」

「そうはいかない！【光喰剣へホーリー・イレイザー】！」

フリードが悪魔払いの剣を振るってくるが木場が出現させた禍々しい剣に受け止められる。

「チイツ!?…」

「コイツは僕が抑える！イツセー君達は先へ行くんだ！」

「悪いな木場！」

「そうは問屋が卸しやせんぜえー！皆さーん歓迎してあげなちやれ！」

「悪魔は滅すべし！」

木場がフリードの猛攻を抑えようとするが、フリードの合図により隠れていたはぐれ神父の集団が急襲をかけてくる。

「えい…」

「ぐはあっー!?…」

数十人がかりだったにも関わらず子猫ちゃんは片手で全員をブツ飛ばした。戦車の特性によるものか。

「怯むな！陣形を崩すな！」

「悪魔に滅びあれ！」

「!？」

「不味い!？」

残存していたはぐれ神父達が一斉に子猫ちゃんに対して大容量の聖水が入った瓶を投げつけてこようとしていた。

いくら彼女でも一度にあれだけの量を浴びたらひとたまりもない。

だが…

「そうはいかないよ!ー」

【いめしから

おり入りて

折り延いし

炎上の歌を紡ぎけり

なぶさのうつつ引きかなぐらん】

リンが割って入り謳を紡ぎ出現させた炎の結界の熱量で急激に沸騰させ神父達に跳

ね返した。

エディルレイドが唯一単独で使用出来る唱謳【坤炎の閃へアイソレイト・ブレイズル
ミナス】だ。

「ぎやあああああ!? 熱いいー!?」

熱湯と化した聖水を顔面に思いつ切り浴びてしまった神父達は断末魔の絶叫を上げる。

「た、助かりました!」

「おのれ! 悪魔共め! …」

子猫ちゃんが安堵したも束の間、残存しているはぐれ神父が襲いかかってくる。

「此処は私とこの子で抑えるからマスターとルナちゃんは先に行つて!」

「OK! とその前に! …」

俺はリンがKOさせた神父の一人を叩き起こす。

「ぐあ! …」

「俺の質問だけに答えろ!

神器剥離の儀式は何処で行われる!」

「ぎ、儀式は地下聖堂で行われる! …」

「其処か… 御役目御免だ!」

「へぶっ!?…」

「ルナ行くぞ!」

「うん!…」

俺は神父から儀式が行われるであろう場所を聞き出した後投げ捨て地下聖堂へと急ぐ。

「ほう、警告したのにも関わらずやって来たか。

だが一足遅かったようだな!既に術式は完成しているわあ!」

「何っ!?…真逆!…」

「ほう気が付いたか!…」

今回の首謀者であるドーナシックが高笑う。

いくらなんでも早過ぎる…!と思っているとボロボロにされたレイナーレとミツテルトと呼ばれていた墮天使達が居た。

成程彼女達の血をも触媒にして術式の完成を早めたのか!

だつたら!…」

「そんな術式俺達が破壊する!」

「そうはさせんよ!カラワーナ、お前達ゆけえい!」

「はっ!」

ドーナシークの号令でカラワーナと呼ばれていた女墮天使の他に数人の墮天使の男達に取り囲まれる。

「イツセー、貴方はあの子達を助けてあげて!……」

「ああ! ルナも無茶だけはするなよ?」

「大丈夫、今日はお月様が満ちているから!……」

「そうか! だったらいくぞ!」

「邪魔立てなどさせんぞ!」

【BOOST!】

「そつちがな! へドラグニティショット!」

「なっ!?!……」

「はや!?!……」

ルナに墮天使達の相手を任せようとする二人の男墮天使が立ち塞がるが俺はドラグニティショットを遠慮無く撃ち込む。

一人はギリギリで回避したようだが、もう一人は直撃を受け跡形も無く消し飛んだ。

「ひ、ひい!?!……あつ!?!……」

残った墮天使が恐れをなして逃げ出そうとすると光の槍が飛んで来て消し飛ばした。

「愚か者が! 敵前逃亡しようとはな!

私はこうはいかんで！

何故ならたつた今しがた儀式は完了したのだからな！」

「何っ!?!」

「はははははは！これで私は更なる高みへの道が約束される！」

「嫌ああアアー!?!」

どうやらドーナシークの野郎が処分したようだった。

同時に奴の口から最悪の言葉を聞かされる。

魔法陣に縛られたアーシアの体に強制分離の術式が駆け巡り神器の核が抜かれていきそれがドーナシークへと吸い込まれていつてしまった。

野郎!…:

一方、Sidelナ

「たかが人間の小娘一人が私らに勝てると思ってるのか？」

「勝てる!…:

「随分と舐められたものだな！」

「舐めているのはそっち…:

イツセーに女性墮天使と数人の男性墮天使の相手を任せられた私は謳を紡ぐ。

というか私は只の人間ではないのだけど…:

「【いめしがら

おり入りて

折り延いし

月星の歌を紡ぎけり

なぶさのうつつ引きかなぐらん」

「なっ!?!…」

「これは!?!…」

「【月星坤の閃ヘルナティックスターアイソレイト・ルミナス】」

「ぐわあああ!?!…」

私は発動させた月星の結界で襲いかかってきた男墮天使を包み込みその中で爆発させたエネルギーで墮天使達を吹き飛ばした。

「い、一体何が!?!…」

一瞬にして私に逆にやられた仲間を目にしてえつと…カラワーナが混乱し驚愕していた。

「まだやるの?…」

「ガキがあー! 舐めるなあー!」

「馬鹿な人…」

私は降伏を促してみるもカラワーナは激昂して攻撃してくる。
「ただど無駄!…」

「なんだと!?!ぐあああー!?!…わ、私の翼があー!?!」

私自身に展開していた結界は彼女の槍では貫く事は叶わず跳ね返されて逆に己の片翼を切り落としてしまっていた。

「おのれえー! 人間の小娘如きにこの私があー!」

「もう終わりにするね…」

「ひっ!?!…ま、待っ!…」

「私はさっき一度だけチャンスをおあげた…それをふいにしたのは貴方自身…」

私は逃げ出そうとするカラワーナに対し自身にかけていた結界を解除してもう一度月星の結界を發動する。

「ああああー!?!こ、こんな所でー!…!…」

エネルギーの爆発でカラワーナは吹き飛ばされボロボロになり沈黙した。

「あ、お月様隠れちゃった…でもまだ大丈夫…」

私は空を見上げ一息ついた。

Side 一誠

「…ドーナシックとかいったな?…俺は決してお前を許す訳にはいかねえ!」

「フン、弱小な転生悪魔如きが何をほざいている？」

「見る！レイナーレの不意な反抗によって傷を付けられたがそれも私の物となった元シスターの神器、【聖母の微笑み】で一瞬で治癒出来る！」

「これでも私を倒せるなどと思いが上がつているのか？」

「奴はアーシアから奪い取った神器で傷を回復した。」

「もういい！・テメエは口を開くな！」

「痛かったよなアーシア：俺が仇を取ってやる！」

「ドーナシークの言葉を聞いて俺は遂に堪忍袋の緒が切れた。」

『実に愚かだな中級墮天使よ：貴様は決して怒らせてはいけない者の怒りに触れた…』

「!?馬鹿なその神器は只の【龍の手へトウワイスクリテイカル】ではないのか!？」

「俺の怒りを感じ取ったドライグが口を開く。」

「ドーナシークは驚愕し叫ぶ。」

「ああ、テメエにじっくりと味わってもらおうぜ!：俺達の力をなあ!来やがれ!」

【W e l s y u D r a g o n ! O V E R B O O S T !】

「俺はブーステッドギアの禁手へバランス・ブレイクである「赤龍帝の鎧へブーステツ

ドギア・スケアメール」を纏った。」

「そ、その魔力の奔流：魔王にすら匹敵しうるだ!?!：真逆貴様は!：二天龍の片割れ、

今代の赤龍帝だともいうのか!？」

「気が付くのが遅いぜ！」

喰らいやがれ!」【ドラゴニックブーストスピニングパンチ】!オラアア!」

「ぶっ!?!がつ!?!べっ!?!…」

俺の正体に漸く気が付きましたも驚愕する奴の隙だらけな所に必殺パンチをお見舞いし上空に打ち上げる。

「まずは!」【ドラゴニティツインメイルスラッシュ】!

こいつはお前に傷付けられた挙句に利用され間接的にアーシアの命を奪う要因になつてしまった夕麻ちゃんとミッテルトと呼ばれた墮天使の分!」

「ぐがああああ!?!…」

無様に落ちてくるドーナシックに龍の双爪による攻撃を加えて再度打ち上げる。

「そしてお次はアーシアの分!」【ドラゴニックブーストスピニングキック】!

「がはあああ!?!…」

飛翔して繰り出した渾身の蹴り上げでまたまた奴を空へと打ち上げる。

「そしてこれが俺の正当なる怒りの一撃だあ!」

【ドラゴニティ・ブレイズバスター】!!」

「こゝ、この至高なる墮天使の私があんな小僧に!?!…ギヤアアアア!?!…!?!…!?!…」

再び急落下を始めたドーナシックに対し俺は背部の砲塔を展開し狙いを定める。
そして即座に引き金を引く。

奴は最早避ける事すら出来ずに消し飛ばされた。

そして奴が消し飛んだ位置からアーシアの神器の核がゆつくりと降下してきた。

「終わったのね」

「ええ、首謀者は俺が消し飛ばしました。

他の奴等は木場達が無力化している筈です…」

「ん？まだ終わりじゃないわね…」

「それは…」

外の墮天使達の討伐を終えてやって来た部長達に報告する。

一連の流れを聞いた部長は悪魔の駒を取り出す。

…でも彼女って神様信仰しているんだよな…それを捨てさせるといっても酷な事なのかかもしれないが…やっぱり彼女には生きて欲しい！

「当事者が欠けているというのにはやっぱり後の事にも影響するから、それに彼女自身も凄く魅力的だから特別措置よ」

「部長、お願いします！」

「分かったわ！」

部長が悪魔の駒をアーシアに近付け転生させる。

「はっ!?…私は確か…」

「起きて早々に悪いんだけど其処で倒れている墮天使の治療お願いするわね」

「レイナー様、ミツテルト様!?は、はい!」

こうして彼女は「僧侶」のグレモリー眷属として転生悪魔となった。

すぐに救出したレイナーレとミツテルトの回復を始める。

「う、うーくん…?」

「あ、あれ?…私確かドーナシックに反抗したけど返り討ちに遭って…アーシアは!?!…」

「レイナー様!ミツテルト様!」

「アーシア!無事だったんっスね!って?…」

すぐに目を覚ました二人はアーシアの姿を目にし飛びつこうとする。

が…

「な、なんで悪魔になっちゃっているんスか!?!…」

「それについては彼に説明してもらおうわ」

「イツセー君!?!…そっか、こんな私達を助けに来てくれたんだ…」

レイナーレが俺の姿を目にすると安堵した表情になる。

やっぱり君は笑っている方が数倍可愛いな!

「ああ、ドーナシックの野郎は俺が消し飛ばして、他の奴等は俺の仲間が無力化させた。でもよく聞いてくれ……」

俺は起きてしまった悲劇をレイナーレ達にも話した。

「そんな!?なんて事を!?!……」

「あんにやろう! 私らの血まで儀式の触媒に使っていたなんて! 一発殴らせてもらいたかったっス!」

レイナーレはその事実には落胆し、ミッテルトはドーナシックに対し憤慨していた。

「アーシア御免なさい!……貴方を死なせてしまつて……」

「この通りっス!……」

「か、顔を上げて下さいレイナーレ様にミッテルト様! 私はこうして生き返られましたしイツセーさんやリンちゃんというお友達とも出会えてこれ以上の幸せなんか望んだらバチが当たっちゃいます!」

レイナーレ達の謝罪を受けたアーシアは半ば狼狽していたがすぐに自分の意思を伝えた。

優しい子だなあ。

それから二日後、部長の計らいでうちに滞在させていたレイナーレ達は今回の件を報告する為にグリゴリへと帰っていった。

赤龍帝同契者とエクスカリバー編

EP IV 「聖に囚われし因縁」

S i d e 一 誠

地位向上が為に何も知らぬシスターの少女を呼び寄せその神器を奪わんと画策した墮天使を討伐し、数週間が経ったとある日の夜にビックリした事があった。

突然リアス部長が俺に対して夜這いをかけてきたのだ。

なんとか理性を抑えて部長を落ち着かせ、彼女の話の間を聞こうとした瞬間、突如出現した魔法陣から魔王級に匹敵する魔力を感じ其処から銀髪のメイドさんが現れた。

それで部長とメイドさん、魔王サーゼクス・ルシファーのクイーンであるグレイフィアさんとの話を纏めてみるとこうだ。

どうやら部長には許婚なる人物が居るらしいのだが部長はその彼に全く好意を抱いてなんかいない。

だけど向こうはそんな事は御構い無しに半ば強引な婚姻を迫ってくるばかりでウンザリするばかりだという。

それで翌日、急に部室に訪れたお相手であるライザー・フェニックスと俺達も対面す

る事になったのだが：…（？ー??）アレ？…ゴシゴシ…一瞬ロンブルさんが居たかと思っ
た。

ライザーの眷属が全員美少女揃いのハーレムだったからだ。

思い出に浸っていた俺だったが彼とライザーを比べた事自体が間違いだった事にす
ぐに気が付く。

かつてライバル視され敵対したがある戦いで和解したロンブルさんとライザーでは
あまりにも女性の扱いに差がありすぎた。

ロンブルさんはきちんと一人の女性としてパートナーのエディルレイド達を愛でて
いた。

対してライザーは己の眷属達を単なるアクセサリーの様な扱いとしてでしか見てい
なく、只女癖が悪いだけだった。

挙句に俺を迎えに訪れていたルナ達をナンパするわで俺はちよいとキレ気味になり
それに対してライザーが眷属の一人をけしかけてきたので軽く返り討ちにしたらその
子を労う事はせずに罵倒するだけの馬鹿男だった。

これじゃあハーレム抜きにしても部長達が奴を嫌う訳だ。

まあそんなこんなで奴も部長も固い意志を曲げないものだから悪魔社会で盛んに行
われているレーティングゲームで白黒つける事となった。

それと俺の提案とライザー側からの打診によって非公式なゲームだという観点からルナ達も助っ人枠で参戦する事になった。

その際、サトリとリナがライザーの態度を見て俺と出会う以前の事を思い起こさせられた為か一層やる気を出していた。

部長達にライザー側が猶予として十日間を与え、その強化合宿後、レーティングゲームが行われた。

道中のライザー眷属一味は何故か戦いを避けていた僧侶の一人を除いて全員ルナ達が相手をし倒した。

無論、木場達も善戦はしていたが相手のクイーンが手強く流石にやられてしまっていた。

そして、残るライザーは俺が赤龍帝の力をもって全力で相手をした。

どうやら俺の奴の不死能力に対する解釈違いがあったようでドラゴニックフルバーストを撃ち込んだらあっさり消し飛んだ。

フェニックスの不死能力に胡坐をかいてあまり素の実力を磨いてこなかった弊害が芯に現れた様だったようだ。

かくしてゲームに勝利した事で部長とライザーの婚姻関係は白紙となった。

それから一週間後の事であった。

「ちっちゃいマスター可愛いー！」

「はわわ！……」

「イイものを見せてもらったわ！」

「ははは……ン？」

「……」

何故かお袋が引つ張り出してきた俺の幼少時代のアルバムを遊びに来たオカ研の皆やルナ達が見てキラキラさせていた。

だがその中で一人だけ様子が可笑しい者がいた。

そう、木場だ。

「イツセー君、この写真は……」

「ああ、それは幼稚園を卒業する前に仲良かった幼馴染と一緒に撮られた時の物だが……」
「いやそうじゃないんだ……」

俺がそう説明すると木場はその写真のある一点に視線を集中させていた。

それは俺の幼馴染が抱えていた剣らしき物体だった。

そういう彼女、なんで剣を持ってたんだ？

ふと抱いた疑問は木場の言葉ですぐに解消される事になる。

「これは間違い無く聖剣の類の代物だよ……」

「聖剣だと?…」

そう言った木場の表情は暗く俯いていた。

後曰…

「…という訳なの…」

「そんな事がアイツに…」

部室で部長に木場の可笑しな様子について何か知らないか話を聞いた。

何年か前に天使陣営の組織の一つが人工的に聖剣使いを作り出すという「聖剣計画」と呼ばれるプランが創設された。

その計画の要員の一人であった木場を含め数十人の被験者達が不適合の烙印を押された為かある日突然計画の創始者によって秘密裏に毒ガスによる処分という名の大虐殺が行われたという…運良く他の被験者達の手助けによって逃げ出し生き延びる事が出来た木場は偶然通りがかった部長に助けられ眷属としての新たな生を拾った。

それが木場の抱えていた闇の深い事情だった。

「後日その大虐殺を行った計画の創始者は破門されたそうだけどね…」

「破門して終わりですか?」

「え、ええ、そう聞いているわ」

「被害者への救済は何も?」

「計画の被験者は裕斗を含め全員孤児だったらしいから…今は人道的な手法で計画そのものは続けられているそうだけど…」

「そうですか…」

俺はふと向こうの世界で遭遇したある団体による事件の事を思い出していた。

表向きではアークエイルと同じエディルレイドの慈善保護団体を名乗っていたが裏では女性孤児を強制的にステインレイドに仕立て上げ、男の孤児は強引に同契者にさせ非道な実験を繰り返していた闇組織だった。

その話を組織から命懸けで逃げ出した一組のステインレイド同契者に聞いた俺とローウエンさんでその組織を壊滅させた事で命を落とす事なかった何十人かはアークエイルの保護が間に合った。

一方の聖剣計画には木場以外の救いが全く無かったのだ…その後の対応は虐殺の実行者の破門だけで済ましている。

挙句そんな忌むべき出来事があったというのにいくら人道的だとはいえ計画は続けられている…それは悪夢でしかなく木場からすれば犠牲者の死を無下に扱い馬鹿にしているのではないかと聖剣に対しても凶りしれぬ恨みを募らせるというのも良く理解出来る。

「なんとか恨みをさっぱり忘れて生きて欲しいんだけど…」

「そう簡単な事ではないですよね…」

これは当事者が最終的には決める事だ。

部外者がとやかく言う資格は無いに等しい。

だが…

「部長、来客が」

「お通しして」

そう思っていたが少なからず木場の因縁に関わる事を避けられない出来事が起きようとしていた。

EPV 「奪われし聖剣」

S i d e 一 誠

「クツ!?・・・何故僕の剣が・・・」

「木場・・・」

部室に突然訪れた二人組。

どうやら教会に保管されていた聖剣エクスカリバーが何本か何者かに盗まれたらしくソイツがこの町に潜伏しているらしいという事で派遣されてきた戦士だった。

というかそのエクスカリバーって本物?

だが間が悪く部室に戻ってきた木場にその事を聞かれ教会の戦士の一人に決闘を申し込んだのだが・・・聖剣への怒りに囚われ動きが雑になり逆に自身の魔剣を弾き飛ばされてしまっていた。

「君の剣は速さが持ち味だろうか?そのメリットを殺してまで勝利を焦るとは・・・確かに以前の聖剣計画は忌むべきものではあるが・・・」

「その計画で聖剣を扱えるようになった君達が言うか?」

「何だ君は?」

「俺からすれば計画そのものを続けた事に嫌悪感しか覚えないぜ……」

「我々を馬鹿にしているのか？」

「馬鹿にしているのはそっちじゃないのか？」

普通だったら犠牲者の事を考えてそんな計画は白紙にするべきだと思うんだが？

神の名の下にって言えば何でも許されるとでも思っているのか？ 天使陣営は考え無

しだと思われても仕方無いぞ？」

「貴様……」

「ちよつとゼノヴィア落ち着いて！……イツセー君も主を馬鹿にするのは流石に許せないよ？」

「救いを本当に必要としている者に手を差し伸べない奴なんて神とは認める訳にはいかないんだがな」

ゼノヴィアと名乗った者の他に居たのはなんと幼馴染のイリナが居た事には驚いた。

「大体アジアだって只その神の教えに従って傷付いていた悪魔を癒したんだろう。」

表向きの面子を保つ為だけに彼女に追放処分下すような馬鹿な教会上層部でなければ彼女が堕天使に狙われて転生悪魔になる必要性すらもなかったんだからな！

正直人命を軽んじているといわれると思われても仕方ない事だと思うぜ？」

「そ、それは……」

俺がアーシア本人に聞いていた彼女の境遇からの考察を二人に言う。

正直怪しい点はいくつかあるが彼女自身は何も間違った事などしていないと断言出来よう。

「それこそ彼女の信仰心が足りなかったからだ。」

ならばせめてもの慈悲で此処で断罪してやろうか」

「は?・・・」

イリナはすぐに過ちに気が付いて口籠るものの一方のゼノヴィアは信仰心、信仰心と言うばかりで話にならなかった。

「今なんて言った?」

「だからせめてもの慈悲だと・・・!?!」

言つてはならない事を言ったゼノヴィアに俺は殺気を飛ばす。

「ここまで言つてもまだアーシアを追い詰めるのか!?!」

信仰心も大事な事なんだろうが行き過ぎると只の妄言でしかねえんだよ!

そう、一方的な理解では決して真に理解しているとは言えねえ!」

「くっ!・・・そこまで大口を叩くのなら私の信仰心に勝つてみせろ!」

「ああ、それが手っ取り早い!いくぜ!」

「なっ!あの騎士の悪魔よりも速い!?!・・・」

「おあたあー!」

ゼノヴィアからの果し合いを受け入れ俺は籠手だけを展開して急接近し彼女の持つ聖剣を弾き飛ばした。

「ば、馬鹿な!?!」

「何もかも弱いな」

「何?!? どういう事だ!」

「お前自身で見つけるしかねえよ」

俺はゼノヴィアにそれだけ言い、後は無視した。

「やり過ぎ……とはいえないわね……所で話を戻すけど聖剣を奪ったのは一体何処の誰なのかしら?」

部長も思う所があったのか逸れていた話に戻す。

「え、ええ、上級墮天使幹部のコカビエルの手の者によるものと断定されています」

俺にのされて喪失しきっているゼノヴィアに代わってイリナがそう言った。

「コカビエルですって!?!……ソイツがこの町に潜伏しているのね」

「もしかしたら奴の目的は」

俺は首謀者のやってきた事を振り返ってみて奴の目的に気が付いた。

もしその通りだとしたら……

「教会上層部は今回の件に悪魔を関わらせないようにとの指示を受けている」

「物が物だから墮天使と手を組むかもしれないって思われているって事かしら？」

その事ならグレモリーの名に誓って決してしないわ！」

「それだけ言質が取れば十分だ。」

行こうイリナ」

「う、うん……」

「部長、僕も行かせて貰います……」

「ちよつと裕斗!?!……」

「……」

俺達が引き止めようとした所で今の木場や彼女達の耳には一切届かないだろう。

痛い目に遭うのがオチだ。

数日後……恐れていた事態が起きた。

木場達が追放されていた聖剣計画の首謀者を見つけたが其処にドーナシークらと共に行動し行方を眩ませていたイカレ神父のフリードまで現れ盗んだ聖剣で仕掛け逆にゼノヴィア達の所持していた聖剣が奪われてしまったのだった。

E P V I 「決意の同契！墮天使幹部を打倒せよ！前編」

Side 一 誠

「木場！大丈夫か？」

「イツセー君か…手酷くやられてしまつてこの様だよ…」

「くっ!?…コカビエルの奴め！バルパー・ガリレイにフリード・セルゼンと組んで一体何を企んでいるんだ?…」

「真逆こんな事に巻き込まれるなんて…」

ボロボロにされた木場達は偶然通りがかつた生徒会のメンバーであり部長の友人であるソーナ・シトリーの眷属の一人である匙 元二郎に発見されて部屋に運ばれてきた。

アーシアが急いで治療し二人から話を聞いた。

イリナは傷が酷くまだ目覚めない。

「バルパー…ソイツが例の計画の首謀者か…」

最も相手も丸腰などではなくあのイカレ神父を護衛につけていた訳だが…

「バルパーは奪った聖剣を統合させるとか言つていた…もしかしたらコカビエルの目的

の一つがその際の術式が発する余波でこの町を人質に捕る気なのかもしれない…恐らく学園を起点にして」

「なんだって!?!すぐに会長達にも知らせてくるぜ!」

木場からそう聞いて匙は慌てて会長達に事態を伝えに行った。

「部長、俺達も!」

「ええ!…」

「念の為魔王様にも救援を打診させておきますわ!」

「朱乃!?!」

「事態は恐らく私達の手だけでは手に負えないものですから」

「そ、そうね!…」

部長は朱乃さんの提案を受け入れ外へと向かう。

「私も戦わせてもらえないだろうか?」

「何?…」

「得物ならまだある…」

「露払いだけならな…それ以上ははつきりいつて足手纏いだ」

「それでいい」

どうやらゼノヴィアは奪われた聖剣の他にも隠し玉があったらしくそう嘆願してき

た。

俺はそれだけ言つて外に出る。

相手は幹部級……ルナを呼んでおくか…。

〜数分後〜

「フフフ……これで聖剣統合の術式は完成だ!」

「よくやったぞバルパー! さあ、町を守りたくばかかってくるがいい! 忌々しき魔王サーゼクスにセラフォルの妹共!」

「コカビエル!」

難無く学園に侵入していたコカビエル一味はグラウンドを起点に術式を張り終え、待ち構えていた。

其処に俺達が到着する。

「来たか!」

「コカビエル! 貴方の目的は何?」

「俺の目的はな……古の戦争を再び勃発させる事だ!」

「戦争再開ですつて!?! ……一体何を考えているの? ……」

「やはりな……」

コカビエルは高らかにその目的を宣言し、俺は予想が当たっていた事に齒がゆむ。

「二天龍共の介入のせいであの戦争は半端に停戦し俺はな退屈で仕方無かったんだ!

だがアザゼルは神器とかいう得体の知れぬ物に現を抜かす始末!挙句に二度と戦争は行わないときた!…」

「だから聖剣を盗み出してこの町を崩壊させようというのか!?!…」

「ああ、そうだ!ミカエルが送ってきたのは雑魚の聖剣使いだけ!これでは少しも満たされない!だから次は貴様等の首を手土産に魔王共に宣戦布告してやろう!

まずはコイツの相手をしてもらおうか!出でよ!ケルベロス!」

「ガアアアア!」

コカビエルはそう告げ新たに魔法陣を展開させると其処から二つ首の狼が数体出現する。

「地獄の番犬ケルベロス!?!こんなものまで!…」

「ガルルー!」

「させるか!」

コカビエルに召喚されたケルベロスは俺達に襲いかかってこようとする。

俺は即座に対応しドラゴニックナックルをブチかます。

「ギャウン!?!」

「雷光よ!」

「キャイン!？」

続けて朱乃さんが雷で援護してくれる。

「流石はバラキエルの娘!」

「あの人の事を口にするなあー!」

コカビエルが同じ幹部の名前を口にするると突如朱乃さんは声を荒げ攻撃を激しくする。

だがそれもコカビエルには容易くないなされている。

二人の間に何かあったのか?…それより今は

「この最強になったエクスカリバーちゃんで隙有りチョンパってねえー!」

コカビエルとの攻防の隙を狙ってあのイカレ野郎が聖剣を構えて襲ってくる。

「ちっ!…:…:だけど俺たちの華麗なる技見切れるのかなあ?」

相変わらずぶざけたイラつく口調でイカレ野郎は再び襲い来る。

「イツセー君、奴のエクスカリバーは!…:」

「甘い!」

「あり!?俺たちの幻惑が見抜かれているですと!」

木場が警告してくる。

だけどな…:イカレ野郎は聖剣の能力で分身したかのように見せかけたみたいだがそ

の手の相手は飽きる程してきたからな!

俺には通じないんだよ!

「はっ!?…今だ!ソードバレルフルオープン!」

「おわっちょお!」

イカレ野郎の能力を一瞬の内に把握した俺を見て呆ける木場だったがすぐに援護し魔剣の雨を降らせる。

イカレ野郎も回避するのに精一杯のようだ。

其処に

「伸びろ!ライン!」

「ホワッツ!」

更に救援に駆け付けた匙が黒いラインを伸ばしてイカレ野郎の統合エクスカリバーを絡めとる。

あれは邪龍を分割して神器にしたものらしいな。

「フリード何時まで遊んでいるつもりだ?」

「そうはいつでもバルパーの旦那よお。この妙な黒舌が斬れないんやす…」

「聖剣に因子を込めれば更に斬味は増す!」

「お?!イイコト聞いちゃったあー!ほいっと!」

「うわ!？」

横目で見ていた老人がイカレ野郎に助言し拘束から逃れる。

成程、奴がバルパー・ガリレイか。

「バルパー・ガリレイ!今こそ同士達の仇を討たせてもらおう!」

「大人しく断罪されろ!」

「性懲りも無い廃棄品と儂の研究成果を奪った教会の犬共めが!因子が無ければ貴様等も只の人間に過ぎぬというのにお」

「何?」

バルパーは木場達を目にすると怒り口を開き続ける。

「儂はな聖剣をどうしても使いたかったのだ。

だが当時は適正が無くてな…神を呪ったさ…だが研究を進めている内にとある因子が必要だという事に気が付いた!」

「因子?バルパー、真逆貴様は!?!…」

「何だつて!?!だつたら僕達は…」

バルパーの言葉にゼノヴィアも木場も真実に気付き声を荒げる。

「因子を被験者から抜き取っていたとでもいうのか!?!」

「僕達を失敗作としようとしていたのはもはや!?!…」

「情報漏洩を防ぐのは当然の事じゃろ?」

これで儂は再び表舞台に帰り咲くのだ!」

「そんな!…」

バルパーの真意を聞いた木場は項垂れてしまう。

たった一人の人物の独りよがりの為だけに、情報漏洩を防ぐ為だけに木場や被験者達は失わなくてよかつた命を…俺は怒りに震えた。

「ああ、全く以て反吐が出るな!…」

「何じゃと?…」

「バルパー、テメエに聖剣を扱える適正が無かつた訳が分かつたぜ…テメエ如きに使われる事を正しき道にこそ使われるべき聖剣自身が拒否したんだろ?」

俺はバルパーにそう言葉をぶつけた。

正しき道に使われるべき物が悪に使われるなどたまらないだろう。

それは俺達にも言える事だ。

「き、貴様等といい天界といい何処迄この儂を愚弄すれば気が済むのだ?」

「道具は使い手の意思次第で悲しみも喜びも生む…それを理解しようとしないうんたに木場達を不良品扱いする資格なんざ一ミリも無いんだよ!」

「イツセー君…ありがとう!」

第二、三の僕等を生まない為にバルパー・ガリレイ！貴方を討たせてもらおう！」

「赤龍帝の言葉に私も目が覚めた…見せよう真なる聖剣使いの實力を！」

「何じゃと!?!…」

「ホワッツ!?!」

俺の代弁に木場達は奮い立つ。

するとイカレ野郎の持つ統合聖剣が輝きを放ち其処から粒子の塊の様な物体が出てくる。

「これは…」

「不味い!?フリードに投入した聖剣の因子が!?!…」

「暖かい!?!…」

「それにこれは聖歌…」

木場が因子を手にとると途端に歌が流れ出す。

俺達にダメージは無いようだが…。

『あの少年は至ったようだ!』

ドライグがそう呟く。

もしや!!

「同士達の声が確かに聴こえた…復讐なんかじゃなく共にエクスカリバーを超えようと

!

「バランスブレイク!【聖魔劍へソードオブビトレイヤー】!」
「デュランダル!」

木場は高らかに叫び己の神器をバランスブレイクさせる。

一方のゼノヴィアは懐から出した包みを解いてエクスカリバーよりも大きな剣を取り出した。

「ば、馬鹿なデュランダルだ?!それに本来反発し合う筈の聖と魔が交わり合うなどありえん!?!…ええい!奴等を始末するんだフリード!」

「アイアイサー!」

二人の得物を見て焦り出したバルパーはイカレ野郎に命令する。

「忘れたのかい?君の因子は同士のもので…今は僕の手中にある事を!はああー!」

「!?しまった!フリード!?!」

「もう遅い!アーメン!」

「ぐげええ!?!」

イカレ野郎は木場の言う通り聖劍が一切機能しなかった事によって手も出せずに二人に斬られた。

「皆…僕らは聖劍を超えられたよ」

木場が一息つき空を仰ぎ見てそう呟いた直後だった。

「そうか！分かったぞ！あのような神器が産まれたのは聖と魔のバランスが崩壊していると見れば説明が付く！とすれば…!?!」

イカレ野郎を倒され何やら発狂し喚いていたバルパーだったがふと己の腹に光の槍が突き刺さっている事に気が付く。

「こ、コカビエル貴様…」

「御苦労だったなバルパー…後は俺が片をつけよう」

「くっ…だがこれだけは言わせてもらおうぞ！先の戦争で先代魔王だけでなく神ヤハウエも死んでいるという事を！…ぐふっ!?!…!?!」

コカビエルに用済みとされた最後の悪足掻きなのかバルパーはそう叫び倒れ伏した。

「なっ!?!…」

「そんな主が…」

「バルパーが言った事は本当なのか!?!」

バルパーの衝撃的な言葉に激しいショックを受けた木場、アーシア、ゼノヴィアは項垂れる。

「ああ、だからこそその小僧の聖魔剣なる本来とは異なる禁手が産まれたのだ。

それに此処にはもう一人当事者が居るではないか」

『…ああ、奴の言葉は真実だ…』

神を死に追いやってしまった張本人の一人であるドライグが口を開く。

「だからどうした?」

「何?…」

「神が死んだからといって世界は止まったか?そうじゃないだろう!」

俺達の幸福って神様の一存で決められるものじゃないだろう!

俺達自身でも作っていけるんだよ!」

『相棒…』

「イツセーさん…」

「だからまず俺達の幸福を壊そうとするコカビエル!お前を倒す!」

俺は幸福は自身で掴み取る物…信仰はその延長でしかないと言リコカビエルに宣言した。

「面白い!ならば貴様の語るその言葉など所詮はちっぽけなものでしかないものと身を以て教えてやろう!」

「それはテメエの独善的なプライドの方だ!」

「言ってくれるな!喰らうがいいわ!」

「イツセー/さん/君!?!…」

コカビエルの投擲する光の槍を俺は避ける事もしなかったので部長達が驚きの声を上げる。

だが…

「いめしがらー」

「何だど!?!くうー…」

其処に呼んでおいたルナが俺の前に立ち月の結界を展開してコカビエルの槍を弾き返した。

「イツセー…」

「ああ、ナイスタイミングだったぜルナ!」

「小娘が俺の槍を防いだだど!?!…いやそれよりもなんだその異質な力のありようは!?!」

ルナの姿を目にしたコカビエルは彼女の異様さに気が付き叫ぶ。

「教えてやろうかコカビエル!俺達の深い絆の繋がりに産まれる力つていうのをな!

実に久し振りの同契へリアクトだ!」

「うんー…」

俺とルナは互いに手を繋ぎ合い、紡いできた絆の力を解放する事を決めた。

E P VII 「決意の同契!墮天使幹部を打倒せよ!後編」

S i d e 裕斗

「り、リアクト・・・?」

「何をする気なの?・・・」

「イツセー君、君は一体・・・?」

バルパーを唆した張本人であり今回の事件を引き起こした墮天使幹部コカビエルに
対しイツセー君がキレた。

イツセー君の怒りを嘲笑いながらコカビエルは光の槍を投擲する。

だけどイツセー君は何故か避ける素振りすら見せない。

だけれども僕らの心配をよそにイツセー君の顔は不敵な笑みを浮かべていた。

それはイツセー君に直撃してしまう寸前に現れた少女がコカビエルの槍を結界の様
な物で防いでみせたのだ。

先日のアーシアさんの事件やライザーとのレーティングゲームの時といい彼女達こ
そ一体何者なんだ?・・・

僕らが抱いたその疑問はすぐに解き明かされる事となる。

Side 一誠

「さあ、いこうぜ！」

「うん……」

「き、貴様！一体何をやる気なのだ!?!」

乱入したルナに対して異質さを感じ取ったコカビエルは目に見えて怯えていた。

「【赤き心 月星を纏いて 契り籠ん】」

奴の言葉を無視して俺は額に巻かれていた特殊な布を解いたルナと両手を合わせ共に同契（リアクト）する為の謳を紡いでいく。

月光の輝きが俺達を包み込んでいく。

「さ、させん！」

「イツセー君!?!」

上空からコカビエルは俺達を止めようとしてくるがもう遅い！

「でやあー！」

バギン！

俺の……いや、俺達の一振りでもコカビエルの光の槍は碎け散る。

「何だと!?!」

「イツセー……君?……!?!」

驚くコカビエルと木場達を尻目に俺の右腕には月と星の光の輝きを体現したかの様な美しい寶石が埋め込まれた純白の銃剣が纏わられていた。

これこそがルナが俺と結んだ絆の契約によつて秘められた力を解放したエディルレイドの真の姿だ。

「な、何なのだその剣は!?!:バルパーが統合したエクスカリバーに匹敵:いやそれ以上のとてつもない力を感じるだ?!?貴様、只の赤龍帝ではないのか!?!」

「ルナを:彼女達をあんな屑に意思を捻じ曲げられて作られた物と一緒にするんじゃないやねえー!」

俺は赤龍帝の兵藤一誠、そして又の名を空賊「赤猫団」のイツセー・ヒョードー、そしてエディルレイド同契者(プレジャー)だあー!

そらあつー!

俺は高らかに名乗りを上げてルナを上空に向けて振るう。

「ぐうおおおおー!?!」

その一振りだけでコカビエルはいとも簡単に吹き飛ばされる。

「く、糞!?!:」

「流石は幹部級耐えたか:」

「俺は古の大戦を生き残った墮天使幹部なのだぞ!こんな所で朽ち果てるなど断じて否

!

ぬうん！」

漸く本気を出し数十本の光の槍を形成させてくるコカビエルだったが俺達もそれを見て更なる謳を詠唱する。

「ルナ、いくぞー！」

『私の力を貴方の手に！…』

推奨戦闘BGM「Forever…」♪

『月影覆いし刻景

闇なる道照らせし明の星状の祈りとせん』

謳を唱え星の波導を纏う。

「!？」

「な、なんて眩い輝きなんだ…！」

「う、美しい！…！」

コカビエルのそれよりも圧倒的な輝きを持つその波導を俺達は一気に解き放つ。

『覇星の流動（フロウズ・ロードスターブレイズ）！！』

解き放たれた星々の輝きがコカビエルの槍を全て飲み込んでいく。

「ば、馬鹿な!…！」

槍を破壊されギリギリ回避したコカビエルだったがその片翼は先の一撃を受けて喪失していた。

「ま、負ける訳にはあー!」

悪足掻きとばかりに奴は全身全霊を懸けたのであろう巨大な槍を投擲しようとしてくる。

「だったら!」

「次で決める!ドライブ!」

【BOOST!】

『月星よ導きのままに』

祈り輝天の空にて乱争の地を討ち砕かん』

へ月星の輝祈剣（ルナティックスターネス・シャイニングブレイドプレイヤー）<!!』

【EXPROSSION!】

倍加しすぐに謳を紡ぎコカビエルの大型槍にその一撃を叩きつける。

「ぐおお!」

『はあああああー!!』

俺達の一撃を叩きつけられたコカビエルの大型槍はヒビ割れていき遂には跡形も無く砕け散った。

「最後の戦場となろうとは……う、うおおおー!?……」

そして最後にはコカビエルをも飲み込みその姿を世界から消し飛ばした。

「ふう……」

一息つき俺は赤龍帝の鎧を解除し、ルナも人の姿へと戻る。

後で質問攻めの嵐だなこりや……そう思いやられている時であった。

「これは大分出遅れてしまっていたみたいだな」

「!」

『お前は……』

校門前の上空に俺と良く似た白い鎧を纏った男が現れる。

「ドライブが反応するって事はお前が白龍皇か!」

「御名答だ。俺はヴァーリ、神滅具「白龍皇の鎧ヘイバイディングギア」を宿し今代の

白龍皇だ。

君が今代の赤龍帝で間違いないようだな。

コカビエルを消し飛ばす程とは予想していたよりも面白い戦いが期待出来そうだ!」

「俺は因縁なんか全く興味は無いんだがな……」

「手厳しいね……今回はアザゼルからの令でコカビエル達を回収しに来たんだが……其処に

倒れているフリード・セルゼンだけでもグリゴリの方で断罪しておこう」

ヴァーリと名乗った白龍皇はそう言つて気絶したイカレ野郎を抱えて去つていった。勘弁してくれ……どうやらタイミング良くルナの事はバレてはいないみたいでほつとはしたが。

赤龍帝同契者と三勢編

EP VIII 「事情説明ともう一人の眷属」

Side 一誠

「ニャー／＼、ω、／＼」

「あー！野良猫さんそれ私のご飯〜！盗らないでえー」

「…」

コカビエルら戦争再開派を討伐した翌日、俺はルナとリアクトし力を行使した時の事を説明する為に皆を集めた。

「改めてよろしく頼む」

「はあ…」

何故か教会に帰った筈のゼノヴィアが何時の間にか眷属になっていたがその理由を聞いて納得はした。

がますます教会陣営に嫌悪感が募る事になったのは言うまでもない。

そーいやイリナは知らないままなんだよな…。

「それで一体彼女達は何者なのか説明してくれるのよね？」

「ええ…それについてはまず俺がとある異世界に迷い込んだ事に始まります…」
「異世界!?!」

俺は皆に迷い込んだ向こうの世界での出来事を可能な限りな範囲で話した。

「核石〈エレメンタルジェレイド〉を生まれ持ち人との共鳴によって武器となれる存在であるルナ達エディルレイドの事、異世界で途方に暮れていた俺が拾われ所属していた空賊「赤猫団」の事、戦いの出来事を。

無論ルナとリンが伝説の血統を持つ存在である「七煌宝珠」である事とあの事については伏せておいて。

「エディルレイドを巡る戦いは激化していききました…一度目は表面上の勝手な考えを押し付け、一方は種を守る為に人間とエディルレイド間の全面戦争の引金を引きかけたところある男によって、そして二度目の永遠を求め過ぎた者達によって…一度目の戦争こそは拡大する前に俺が尊敬する人物達の活躍によって終息しました。

ですが…問題はその後だった…」

「どういう事ですか?」

「ああ、その全面戦争の引金を引こうとした男はアークエイルの元トップの男だったんだ」

「アークエイルってそのエディルレイドさん達を保護をしている組織の? どうしてそん

な方が?…」

「奴は保護こそそうたつていたもの奴自身はエディルレイドを表面上だけでしか見ていなかった。」

そう、争いの道具として、兵器としての側面だけでしか奴はエディルレイドという種族を見ようとしていなかった…そんな凝り固まった考えと偏見で彼女達に真の理解を示そうとはせずに挙句無かつた事にしようとしたんです…」

「それって!?!…」

俺のその言葉に部長達は驚く。

俺は一生あの男、フアルク元アークエイル総監の仕出かした所業を忘れる事はないだろう。

俺やアニキを雇った暗殺者に襲わせ、離れ離れにし拘束していたレンさんやルナを強引に眠らせて二度と目覚めさせないようにしようとし、エディルレイドという種を守ろうと戦つた「カオスクワイア」との戦争を拡大させようとした事は到底許せる事ではなかった。

そして、責任の追及を受けてアークエイルを更迭されて以降行方不明となつていたが何時の間にかエディルガーデンへと潜み、二度目の「オルガナイト」との戦いをも裏で操りキースさんの思い描いていた理想を悪い方向へと唆して彼とパートナーでありま

たレンさんやルナとも友達だったシアを苦しめ続けていた事も…。

まあ、同レベルで他にも許せない存在がいるがそれはまた今度にしよう。

「それで君は教会に対してあれ程までの嫌悪感を持つていた訳か…今思い返せば確かに可笑しいと思える点がいくつもあるな…」

そうゼノヴィアが反応を示す。

この世界の教会もあの男が統括していた頃のアークエイルとまるで同じのように感じた。

信仰心と発展の為なら多少の犠牲もやむなしとの考えは非常に危険であり尚それが何を引き起こすのかをほとんど理解出来ていない節があるのには流石にどうかしていると思った。

「そういうえばイツセー先輩、ルナさん達を拘束されただけでなく先輩も襲われたって話ですけどどうしてそこまで？」

子猫ちゃんが疑問をぶつけてくる。

「それはエディルレイド側にのみ決して覆せないルールがあるからだ。

そう、個のエディルレイドは一人の人間としか同契出来ないっていうね…それも死ぬまで…だから既にリアクトを結んでいるエディルレイドを手に入れる為にはパートナーを始末するしかなかった…今思えばルナ達を利用しようとした不穏分子が他にも

紛れ込んでいたのかもしれないな…」

「そうですか…」

子猫ちゃんは納得したようだが何か似た様な思い当たる様な事があるかのような表情をしていたが一体?…

「話は分かったわ…おいそれと話せる内容ではないようだし私も魔王様方にはこの件は伏せておきましょう」

「そういう事でお願います」

「それはそうと漸く私のもう一人の眷属に施していた封印を解く許しが出たの!」

「ああ、僧侶の…」

「その子はとても人見知りするんだけど…まあ会ってみれば分かると思うわ」

「そう部長に言われて案内された嚴重にKEEP OUTな部屋の中に居たのは…

「へぐ!?!…な、何事ですか!?!」

「貴方の封印解除許可が出たからお迎えに来たのよ」

「嫌ですく僕は棺桶の中が良いんだ!」

おかつばへアーの可愛らしい子だった。

「ねえ?なんでこの子男の子なのに女の子の服着てるの?」

リンの何気ない一言ですぐに一瞬でも可愛いと思つた俺を殴ってくれと思つた。

「だって可愛いんだもん！」

「女装趣味持ちかい！」

「どうか貴方達誰なんですかー!？」

「あ、コラ！ギヤスパー…もう!…」

ギヤスパーと呼ばれた女装男子は俺やアーシア、ルナ達に警戒したのか目の色が変わる。

「ン?…これは」

「?あれ黒髪のお姉さんと子猫ちゃん動きが止まってるような…」

俺達は何故か朱乃さんと子猫ちゃんの動きが全く動いていない事に気が付く。

成程…これはもしかして

「お前の神器の力だな?ギヤスパー」

「ひえ!?な、なんで動けてるんですかー!？」

ギヤスパーの神器が人や物の動きを止めさせる力だと思いつた俺は話をする。

「その様子だと上手く制御出来てはいないみたいだな…まずはそのひきこもりなのを修正しないとな」

「へ?」

「はいはい!その子の面倒は私が見るー!」

リンがギヤスパアの性格補正を買って出る。

成程相性はこの中でマシかもな。

だがアホっ娘なリンですら手を焼く筋金入りの問題児で一向に治らなかつたのは予想出来なかつたが……まあ彼の生まれからしたらこれが普通かもしれない。

後は時間が解決してくれる筈だろう。